

はじめに

凧は紀元前500年頃に中国で生れたといわれ、いつしか日本へ入ったものときられている。その日本の凧はリアルな中国の凧に較べ、世界に例をみないほど形態に工夫を凝らして作ってある。

しかしながら日本の大切な行事にも深くかかわり、伝統の中に育まれてきた各地の優れた凧も細々と残存しているにすぎず、完全に滅び去ったものも数多い。事実、筆者の郷土姫路市でも昔は蟬の形をしたセミ凧があつたという（日本玩具博物館・井上重義館長談）。筆者は昆虫民俗上、多くの昆虫方言を調査したことがあるが、その地方の昆虫方言も親から子へ子から孫へと言い伝えられてきた。しかし、ともすれば忘れられ魔語になる運命にある。

この昆虫凧にしても全く同じことで、その土地に遠い昔から親しまれてきた凧と、その土地の人ですらその存在について何も知らないことが多い。筆者の興味ある分野、昆虫を題材とした和凧は数も少ないが、今も各地で見られる郷土の昆虫凧を紹介してみよう。

《 手回し凧 》

中国にはリアルでまたカラフルな蝶凧が極めて種類、数とも多いが日本には極端に少ない。つまり、日本の古くからの民間伝承では、蝶は死者の靈魂が乗り移ったものと考えられており、吉祥柄（おめでたい模様）としては用いられることはなかったようだ。これらが凧の流行時に影響があったのではないかとおもう。

愛知県安城市桜井

有名な柿の木金助物語にちなむ。名古屋城の金のしゃちほこを大凧に乗りうるこを3枚はがして盗んだため、役人につかまり、それ以後は名古屋近辺には大凧の製造は絶対禁止のお触れがでたという。そのため凝った小さな虫凧が多くみられる。岩瀬仙松氏、岩瀬良吉氏が現在も制作中。

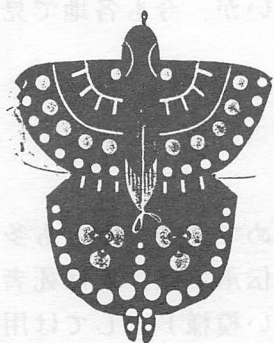
山口県下関市安岡

蝶凧の歴史については伝承者、安本白州氏によると戦後70才位のおじいさんが亀山八幡宮（下関市）の凧揚げ大会に於いて揚げていたという。大変なデザインで（模様がなんとなく戦国時代の鎧をほうふつきせる）ルーツを調べたそうである。揚げていたおじいさんは、大分県豊後高田市出身という。しかしルーツは四国方面にあるのではという感触を得、安本白州氏はそうおもわれていたという。しかし凧に詳しい愛媛大学の村上教授によると、そんな話しは聞いたことがないということである。いまだ下関安岡の蝶凧のルーツはわからない。安本白州氏、豊住国義氏が制作される。

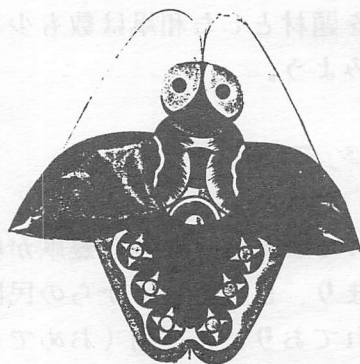
香川県高松市

お土産用で組立式の蝶凧。榎木下商店で制作されていたが現在は廃絶しているようである。

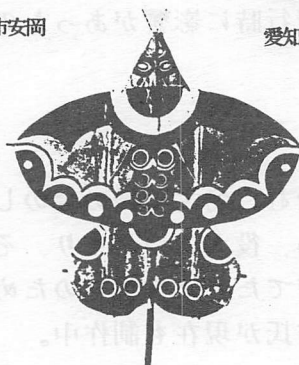
郷土のチョウ凧



山口県下関市安岡



愛知県安城市桜井



香川県高松市

《 せみ 凧 》

昆虫凧の中で、一番多くデザイン化されているのがセミ凧である。

真夏の代名詞ともなるセミを、お正月や節句に揚げるのはなぜだろうか。

凧の専門書をひもとけば、セミは次々と生まれ変わるため再生を意味し、縁起が良く、長生きにあやかろうとセミの姿を揚げたとある。さらにもっと詳しく調べたものには、故新坂和男氏が「凧の話」に記されている。

すなわち「昆虫の中でセミが選ばれたのは、清水完治「満玩吉祥譜」（「鯛車」七号）によると、セミは「高木に止まるを以て陽に近きものとなし、また脱殻するところから未来に復活するの意を表す」とある。すなわち高木に止まることにより、陽つまり太陽に近づくことにより縁起がよいとか、セミが殻から脱け出る蟬脱の意味は、いわば古い習慣や形式を捨てて全く新しくなるということにより復活を意味し縁起がよいのであろう。

また新坂氏によると「中国の漢時代にあつては、地中に長くあってから地上に出てくるその生命力から、セミが再生を可能にすると考えていたらしく、死者の口中へセミをかたどった玉を副葬品として入れたといわれる。」

「セミ凧の形はこの玉のセミの形とよく似ているので、おそらくともに‘未来に復活する’ことを意味し、吉祥にあやかっただけのものであろう。」とある。

セミの縁起のよさにもまだ意味がありそうなので辞典類で調べると、いろいろある。つまり

せんけん

蝉娟（蝉娟） 上品で美しい

せんてい

蝉蛻 セミのぬけ殻。つまり世俗をぬけ出ること

せんじやう

蝉噪 セミがやかましく鳴く。つまり人々が、がやがやとやかましく騒ぐ様。

これは、凧を揚げることにより賑やかで華やかな様子に通じる。

などが考えられ、セミ凧が一番縁起のよい昆虫凧にふさわしかったのではなからうか。

またセミ凧の稿を終わろうとしたら、セミについて次のことが分かった。セミは幼虫及び成虫になっても木の汁を吸うだけで何も食さない。つまり上品な昆虫であるのも一つの縁起の事実であらう。

大分県杵築市

温泉で有名な別府から約30分313号線を北上したところに大分県杵築市がある。武家屋敷のつづく海辺のまちで、小京都とも称され、国東半島の入口にあたる。

この杵築には、長崎系の角立四角形の次郎次凧という、制作者福田次郎次氏の名をとったセミ凧があった。しかし次郎次さんの死亡とともに廃絶となってしまった。

福岡県戸畑

大正年間から作られている一文凧（子供用の安物凧）で、創始者の竹内孫次氏の名を冠して孫次凧という。竹内孫次氏が昭和45年、85才で没した後、跡継ぎのないまま廃絶したかにみえたが、昭和45年以後は孫の竹内義博氏及び夫人の日出子氏が受け継がれている。

戸畑港に入港する船の船員たちに賞揚されたものらしく、セミを童画風に描いたその作品は面白く、ここまで発展してきたもの。戸畑駅裏の民芸店・カイトハウスで制作中。

静岡県大須賀

遠州の大須賀は多種類の変形凧があることで知られている。中でもこのセミ凧は人気のある昆虫凧のひとつで、ユニークな形態である。九州などのセミ凧は目が大きく突き出しているが、この凧では本体の中にすべてを圖案化して入れ込んでいる特徴がみられる。心棒は丸竹、弓うなりと縄尾が付く。

凧絵師・柳瀬松太郎氏亡きあと、子息・柳瀬重三郎氏および地元の一二三（ひふみ）会が受けついでいる。しかし今も、全国から注文が殺到するため制作はおそくなる。

香川県三豊郡詫間

ともかくカラフルな蟬凧である。また美しく目立つ。詫間駅の近くに住まれる磯崎なつえさんは、三代目の女凧師である。最も得意なセミ凧は、夏によくセミが鳴き子供の気持ちになり、喜ばしてやろうと思って25年余りに創作したという。紙は宇陀紙を使い、目玉の丸い部分は竹の皮を使う。胴体部分は身と皮のつ

いた竹を使って制作されている。割合にセミ凧は形状が複雑でけっこう手間がかかるといっておられた。

たまたま握った筆で自由自在に彩色されるためか、このセミ凧にはひとつとして同じものがないのも魅力のひとつである。

大分県高田市

豊後高田のセミ凧は大きな目に特徴がある。形態が大変面白く、配色が今ひとつというところか。しかし、これがその土地で生れ育まれた民芸凧なのかもしれない。制作者・藤原三郎氏亡きあと子息・靖彦氏が受けつがれている。日本の凧大全集によれば、九州のセミ凧のデザインはマチス、ピカソにも負けない素晴らしさと賞賛されている。

山口県下関市安岡

詳しいことは分からないが、フグ凧を創作された有名な凧師・安本白州氏によれば、当年82才の安本白州氏の子供の頃から伝えられてきた安岡のセミ凧であるとの事である。その形態からはまさしく九州に伝わる大きな目の特徴がある。

愛知県名古屋市

古流名古屋凧として知られる。ある資料によると寛永年間より作られ、大人の遊びとして発達したものといわれる。また江戸時代後期に作られたとの説もあり本当のことはわからない。当時武家の隠居などが暇にあかしていろいろ工夫、制作されたもので、大変に精巧かつ作り方が凝ったものとなっている。竹にしても季節に関係なく揚げたため、冬期、伊吹おろしの強風に耐えるため普通の竹では狂いが生ずるため、わざわざ煤竹を使用していた。新しい竹で作ると一度揚げただけで、風のため骨がたわみ元に戻らないからという。

天保・明治の文献を手探りに、佐藤昌明、野田実正氏などが復活制作されている。

その他神奈川県秦野市、大阪市西成区（廃絶）、沖縄県那覇市、東京都、静岡県三川（廃絶）などがある。

郷土のセミ凧



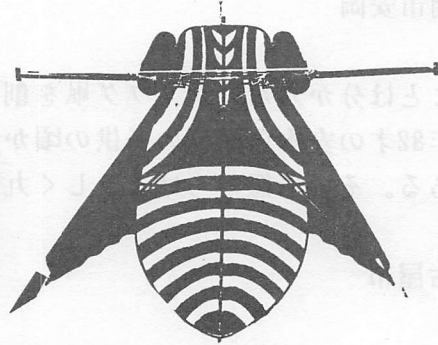
大分県杵築市



香川県高松市



静岡県大須賀



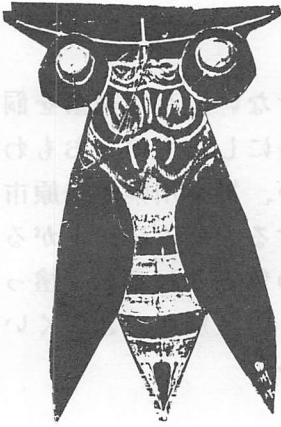
愛知県名古屋



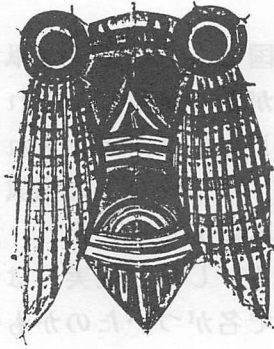
東京都



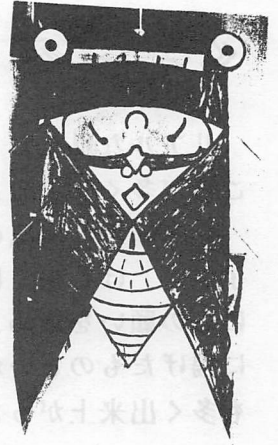
東京都



山口県下関



香川県詫間



沖縄県那覇市

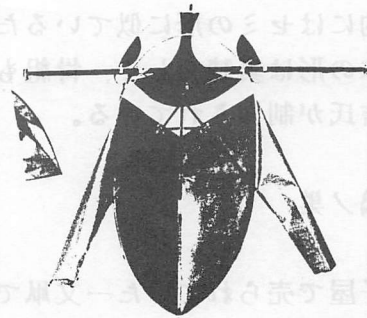
↑ 郷土のセミ凧 ↓ 郷土のアブ凧



神奈川県伊勢原市(4軒)



愛知県名古屋



愛知県名古屋

《 アブ凧 》

リアルな凧でしられる中国でも、このアブ凧はみかけない。昔は家畜を飼うところが多く、そのためアブが多く発生し、それをモデルにしたものとおもわれる。

いろいろな病気の媒体としてアブが考えられたためか、神奈川県伊勢原市では子供が、はしか、ほうそう、百日咳などの病気が流行すると軽く病が上がるようにとの願いを込め、アブを凧にデザイン化し、魔よけの色とされる赤で塗って空に掲げたものといわれている。しかし現実にはセミ凧との区別がつきにくいものも多く出来上がった凧の形で名がついたのかも知れない。

神奈川県伊勢原市

アブをモデルに明治30年代、伊勢原市東大竹大宝寺住職（当時）の加藤明粹氏によって制作された。その後、アブ凧作りの技術は加藤明粹氏から東大竹自徳院住職（当時）の堀井天祐氏および川口定吉氏へと伝えられた。川口定吉氏の子息・勇吉氏の時に最盛期を迎え、神奈川県の子供たちに深く愛用された。

当時のアブ凧は、一般にせんみ凧（セミ凧）とよばれる凧で、現在のものより横に細長く全体的にスリムに出来ていた。その後、川口勇吉氏の妹で厚木市七沢の青木きく氏がこの技術を継承し伝統をまもったが、やがて製作が中止され廃絶した。10年近く途ざえていたアブ凧も、伊勢原市西富岡の三川由利五郎氏により復元され現在にいたっている。

愛知県安城市桜井

一般的にはセミの形に似ているためセミ凧ともよばれる。その優れたデザインと半立体の形は素晴らしく、骨組も手が込んでいる。セミ凧と同じく岩瀬仙松氏、岩瀬良吉氏が制作されている。

埼玉県鴻ノ巣

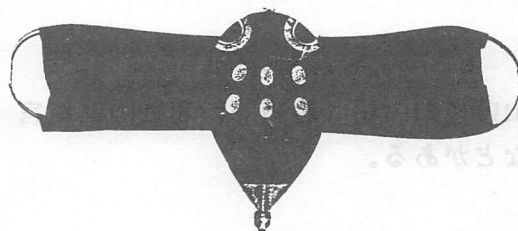
駄菓子屋で売られていた一文凧で昭和の初期に廃絶してしまった。木版に手彩でより安価にするため、極度に描彩や形態を単純化してある。現在この地方での好事家により復元されているようだ。

埼玉県岩槻市

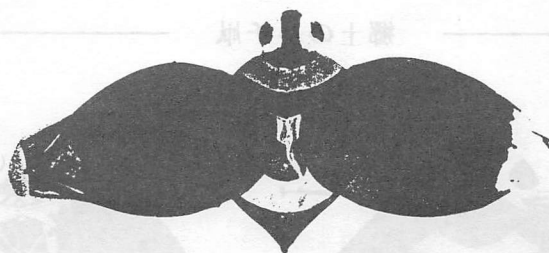
鴻ノ巣同様、駄菓子屋で売られていた一文凧。単純な図柄で、木版手彩色による描彩である。昭和初期に廃絶してしまったが、最近、復元されつつある。

以上のほか愛知県名古屋市の古流凧、岐阜県各務原市などがある。

郷土のアブ凧



埼玉県岩槻市



神奈川県伊勢原市 (3代目)



埼玉県鴻ノ巣

中国にも多くのハチノズがみられるが、日本にも少しは郷土ノズとしてみられる。ハチは古代から人間と深い係わりがあったからもっとノズとして利用されてもよかったのではないだろうか。

愛知県名古屋市

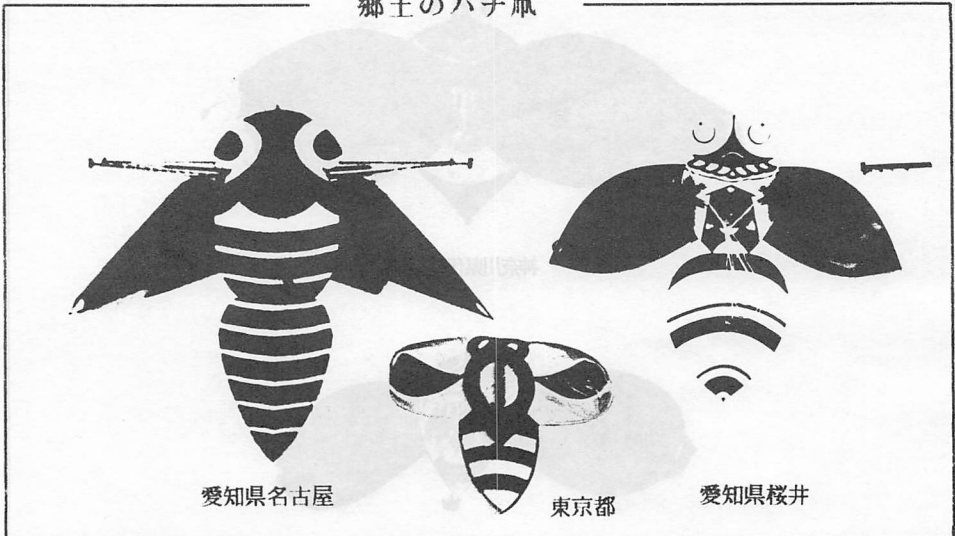
セミノズとおなじく天保・明治の文献を手さぐりに佐藤昌明氏たち名古屋のノズの会員が古流ノズを復活させている。やはり狂いの生じない煤竹を使用している。

愛知県安城市桜井

形態が凝っており、素晴らしい昆虫ノズである。岩瀬仙松氏、岩瀬良吉氏が制作している。

以上のほか和歌山県伊勢山田（廃絶）、和歌山県新宮（廃絶）、東京都の印刷ノズ、千葉県川崎市などがある。

郷土のハチノズ



《アリ鼠》

詳しくは分からないが埼玉県秦野市に昔からあったとの事である。作者に復元を依頼中。

《ムカデ鼠》

ムカデ（百足）は昆虫ではないが、いわゆる昔の虫として紹介しておこう。日本に残るムカデ鼠は中国大陸にあるムカデ鼠の模倣であろうといわれている。

しかし、ある文献によると幕末明治の頃、神奈川県小田原の城下町に大久保家伝来のムカデ鼠があったといわれており、純粹の和鼠であるかも知れない。

そもそもムカデは毘沙門天のお使いだといい、各地の毘沙門様をまつているところにはムカデの絵馬が多くみられる。本来気味の悪い虫であるムカデを柔らかく美しく描かれる「百足」は「お足が多い」とかついで、大阪商人がよく絵馬をあげる。つまり商売繁盛、千客万来を願ったものという。ムカデ鼠もいわば目出度いときに使う鼠かもしれない。

中国のムカデ鼠は龍頭ムカデ鼠といって一番最初の部分は龍の頭になっている。しかし日本のムカデ鼠はまったくなくなっている。これらのことからムカデ鼠は必ずしも中国伝来とは考えられないとおもう。

福岡県柳川市

福岡県柳川市は北原白秋の里であり、ロマンあふれる郷土の鼠があったという。郷土鼠は明治20年生まれ故山下仁三郎氏により創始されたものであったが、戦前にすべて廃絶した。しかしその後、白秋の系統を踏む趣味家で詩人でもある北島勉氏の手で鼠は復活していた。この北島氏も10年余り前、惜しまれながら逝去されたという。しばらく柳川の郷土鼠を受けつぐ者はいなかったが、柳川トラベルの代表者・坂田信義氏により最近復活されている。

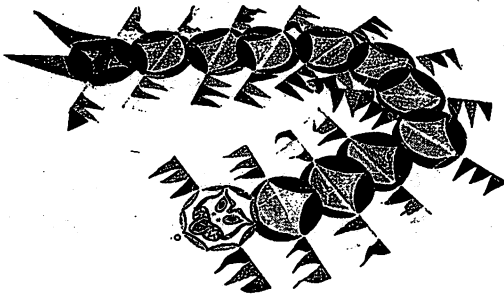
ムカデ鼠は、坂田信義氏によると僅か2点だけ柳川市に色あせたものが残っていたそうで、苦勞して復元したという。有名な四国香川県のムカデ鼠と大きさ等はあまり変わらないが、色相がより南方的なのとムカデの顔が面白い。口からひげが出ているのと目が立っているユーモラスさは、一度見たら忘れられない。色付けの時に蠟（ろう）を使って書くのも大変珍しい。

香川県高松市

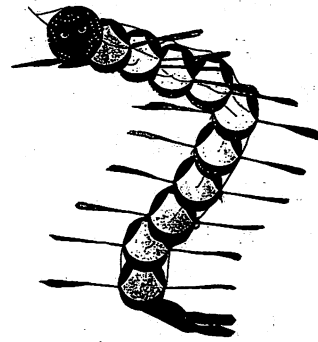
大変有名な立体凧で、ルーツをたどれば中国から渡来したものというのが定説である。木下嘉一、井上鷹雄という名凧師がいたころは、海外にまで輸出していたという。しかし昭和48年のオイルショック以来生産数は落ちていったそうである。ともかくムカデ凧の佳品としての風格を漂わしている。

その他福岡県浮羽郡田主丸町に、しだ凧とよばれるムカデ凧があるが、最近では制作されていない。

郷土のムカデ凧



福岡県柳川市



香川県高松市

おわりに

筆者は全国で昆虫凧を制作されている、いわゆる凧師の方ともおいおい接触を持ち調べてきたが力不足で間違いも多いのではと心が痛む。しかし、ある凧師はながいこと凧を作っているが、そんな分野で凧を調べている人は初めてだ、頑張ってください。私の死に土産に最後の凧を作ってあげよう。しかし歳のためミニ凧で許して……。そんな理由なら昔から保存していた2つのうちの1つを分けてあげよう。とってくれた老いた女凧師など、郷土の昆虫凧の伝統を守ってきた凧師が消えゆくこの実情をみると、凧師の群像や生いたち実情等を調べ、その凧が廃絶し、色あせたり、骨組みもわからなくないうちに調べて記録し、昆虫凧のみならず郷土の凧を収集保存したいものである。なんらかのかたちで、この拙文が役立ってくれれば幸いである。尚、この稿は平成2年、姫路市立科学館の特別展「凧の科学－凧はなぜあがるのか－」に執筆したものに修正加筆をしたものである。